農業改良
中丹 普及センターだより
第8号

「あずき」の生産振興

～ 産学官連携の取り組み紹介 ～

多くの農家が昔から栽培してきた小豆、『丹波大納言』。府内の小豆栽培面積（六五一㌶）の半分は中丹地域が占めています。収穫調製に多くの労力を要することから、栽培者の高齢化に伴い栽培面積は減少しています。

府では小豆の生産量拡大を図るため、普及センター・試験研究機関・機械メーカー・大学などで『産学官連携普及強化プロジェクト』を組織し、地域の営農・ほ場条件等に応じた「小豆の機械化体系」の定着をすすめています。普及センターでは集落組織への技術普及に重点を置き、増収と収穫時の損失軽減について、実証や現地研修会等の活動を行っています。

これまでに中丹地域でコンバイン五台が導入され、平成二十年は、四〇㌶で刈り取りされました。平成二一年度は省力的な機械化体系が定着するよう雑草防除や省力的な乾燥方法等の取り組みを進めます。

小豆の省力化栽培をご検討の場合は、是非とも普及センターに御相談下さい。

コンバイン収穫を想定した種機を実演（7月25日）

研修会で作業安全を確認（10月28日）

収穫時のロスを減らすための調査を実施（11月13日）

コンバイン収穫の実演会（11月17日）

先駆的な省力機械化組織 河守地区営農組合
（第36回全国豆類経営改善共励会で農林水産大臣賞受賞）

京都府中丹広域振興局農林商工部

◆発行◆
平成21年3月

中丹西（にし）農業改良普及センター
（担当地域：福知山市）
〒620-0055 福知山市篠尾新町1-91
TEL0773－22－4901
e-mail：chushin-no-nishi-nokai@pref.kyoto.lg.jp

中丹東（ひがし）農業改良普及センター
（担当地域：舞鶴市、綾部市）
〒623-0012 綾部市川糸町丁畠10-2
TEL0773－42－2255
e-mail：chushin-no-higashi-nokai@pref.kyoto.lg.jp

“築いていこう　差別のない　明るい社会”

『紫ずきん』20年度の取り組み

～出荷額１億円突破! ＆ 新品種「紫ずきん2号」の紹介～

◆一億円突破

府の「ブランド産品」に認定されている黒大豆枝豆『紫ずきん』の販売額が、中丹管内で初の一億円を突破しました。

中丹地域における紫ずきん栽培は平成八年から始まり、二十年度は過去最高の二三ヘクタールで栽培されました。

段時きや熟期の異なる「紫ずきん2号」の導入により、栽培で最も労力を要する収穫期の分散が可能となったため、一戸当たりの栽培面積が増加し、また、新規に栽培に取り組む方も増え、大幅に出荷額を増大できたと考えています。

開花期に関係機関で巡回調査

◆新品種　紫ずきん2号について

「紫ずきん2号」は、京都府農業資源研究センターで「紫ずきん」と「玉大黒」という品種を交配させて育成した品種で、次のような特徴を持っています。

①収穫日：「紫ずきん」に比べ約二～三週間早い。(は種時期や地域などにより異なる)

②病気抵抗性：茶しみの原因となるダイズモザイクウイルスにかかりにくい。

③草姿：「紫ずきん」に比べ分枝数・主茎節数ともに少なく、主茎長やや短くコンパクト。

④莢の肥大の揃い：紫ずきんに比べ莢肥大が揃い易い。

以上のことから、中丹地域では六月十五日を基準に播種し、「紫ずきん」より密植にして植え付けています。また、株ごと収穫や機械収穫が可能です。一方、収穫時期が高温時期のため、水や保冷庫で莢を冷やしたり、鮮度保持の出荷袋に詰め素早く袋の口を閉じて、食味の低下防止を行うことが必要です。

左：「紫ずきん」 右：「紫ずきん2号」(2006年、農資セ)

新しい小豆乾燥技術の取り組み事例

◆小豆を大量に乾燥する方法

～平乾（ひらかん）を使って～

コンバインで小豆の収穫を行っている農事組合法人「たち」では、温度調節のできる二坪の平乾（平型静置式乾燥機）を使用して小豆を乾燥しています。

乾燥作業は、通風乾燥で水分が十七％程度に下がったのを確認してから加温乾燥を行います。乾燥ムラが生じないよう定期的にかき混ぜ、ゆっくり一週間かけて乾燥します。最大張り込み量が一・五トン程度のため、コンバイン収穫は数回に分けて行います。

小豆の乾燥方法で疑問がありましたら、普及センターへご相談下さい。

農事組合法人「たち」の小豆乾燥作業

頑張る中丹の担い手

新規就農者

■中丹地域で頑張っておられる新規就農者を連載で紹介します。今回は綾部市坊口町の実践農場研修を終えられた小西秀測さんです。

小西さんは伊丹市の出身で現在は、三四歳。奥様と二人暮らしです。ハウスで万願寺トウガラシとみず菜の栽培を研修されました。

研修で栽培したみず菜を収穫される小西さん

○実践農場で研修をするきっかけは何ですか?

たとえ、自給自足の生活になってもチャレンジしてみようと仕事を退職し、坊口町に移り住んだのですが、なかなか自分に農業ができるとは思いませんでした。普及センター等が開催したハウス見学会に参加し、先輩の農家の方から「あんたもやってみたら」と言われて、ハウス栽培の研修を受けようと決めました。

○今後の経営の方向は?

必要となる生活費と研修の規模での農業所得には大きな開きがあり、まだまだ農業で暮らせるようになっていません。まずは、栽培技術の向上に力を入れて、少しずつハウスの規模拡大をしようと思います。また、水稲や小豆の面積も拡大して、生活が成り立つ経営にしていきたいと考えています。

組織担い手

新たな農業の試みを　株式会社『農夢（のうむ）』

平成十九年十月、京都府、綾部市、JAグループ、農業者などが出資し、府立農業大学校卒業生の受け皿と京野菜等の生産振興を目的とした株式会社『農夢』が設立されました。

綾部市舘町の二七棟のパイプハウスで、昨年四月からみず菜栽培を始め、今では府内第四位の出荷量になるまでに至っています。

この会社には、昨年の栽培開始から農大卒業生の二名が従業員として毎日みず菜の生産・出荷作業を行っています。

鉄尾さんは「人を雇えるような規模の大きい、堅実な経営をする農家になりたい」、石田さんは「将来は実家の農家を継ぎ、新規就農者が魅力を持てる大規模な農家になりたい」と農業への夢を持って活躍中です。

中丹出身の鉄尾さん

京都市出身の石田さん

地域ではばたく京野菜の新しい担い手

－京野菜新規栽培セミナーを受講して－

普及センターでは京野菜の新規栽培を目指す方を対象に「京野菜新規栽培セミナー」を開催しています。今回はセミナーの受講をきっかけに万願寺トウガラシを栽培されている、舞鶴市の亀井さんをご紹介します。

公務員を退職した亀井洋子さんは、万願寺トウガラシを栽培している近所の人に「教えてあげるから」と勧められ、百本の栽培からスタートされました。二年後にはご主人も退職され、トウガラシ栽培に参加。現在は五ａ、ハウス四棟の栽培に規模を拡大されました。

毎日仕事があること、夫婦共通の話題が出来たことが就農して良かったことと感じておられるそうです。

一方で、ハウス管理のため、一日も家を空けることが出来なくなり、田んぼとは勝手が違ったそうです。

当分の間は万願寺トウガラシに専念し、将来はハウスを周年利用する計画を持っておられます。

毎年新しい「しまった」を経験するけれど、手をかけて成果が上がればうれしいし、色々な経験の積み重ねが新鮮でやりがいがあるとおっしゃっています。

盛況の「食の安全性」向上研修会

中丹地域農業士会

研修会であいさつされる中田地域農業士会長

中丹地域農業士会は中丹地域の農業者に広く呼びかけて、十一月二十日に科学ライターの松永和紀氏を招き研修会を開催しました。食の安全性への関心が高く、参加者は九三名を数える盛況で、松永氏の「安全、高品質な食品を安定生産する農薬〝学〟」と題した講演に対して「農薬を正しく使う理由を消費者に伝えることの大切さが分かった」など、多くの意見が寄せられました。

今後とも農業士会が地域の農業振興にますます活躍されることが期待されます。

新しい農業士さん よろしくお願いします。

和久由紀子さん（福知山市）

就農して二八年、主に福知山特産のキュウリ栽培と地元で開設している直売所向けの野菜を栽培しています。

農業の担い手が高齢化し、耕作放棄地が増えているので何とかしたいと考えています。

四方博子さん（綾部市）

ミニトマトを中心に、夫と二人で農業を営んでいます。ここ数年は、直売野菜と野菜を使ったパン製造を仲間とがんばっています。

退任された農業士さん、お世話になりました。

鎌部勉武さん
指導農業士
（綾部市）

足立悦子さん
女性農業士
（福知山市）

永井寿広さん
青年農業士
（綾部市）